

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 22 日現在

機関番号：33937

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520531

研究課題名(和文) 日本資料を視野に入れた二十世紀香港粵語の総合的研究

研究課題名(英文) A Comprehensive Study of Early Cantonese in Japanese Teaching Materials

研究代表者

竹越 美奈子 (Takekoshi, Minako)

愛知東邦大学・経営学部・准教授

研究者番号：50340401

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円、(間接経費) 570,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、19世紀の西洋人資料、20世紀前半の日本資料、20世紀後半の香港資料を用いて、近代粵語を通時的に研究することである。その結果、19世紀粵語は口語の中に複数の文体が存在していたことがわかった。これは現在でも漢語(ここでは広く方言も含んだ意味での中国語を指す)に特徴的な現象であり、先行研究では、明清時代の口語にも書面語に近い優雅なスタイルと地方の方言をそのまま話す粗野なスタイル(場合によってはさらに両者の中間的なスタイル)が存在していたと報告されている。本研究により、19世紀の広東でも口語の中にいくつかのスタイルがあり、同じ人が場に応じて使い分けていたということがわかった。

研究成果の概要(英文)： This is a historical study of early Cantonese by the materials compiled by Western people during the 19th century, the materials compiled by Japanese in the early 20th century and the materials compiled in Hong Kong in the late 20th century.

In conclusion, colloquial Cantonese were spoken in various styles in the 19th century. This phenomenon is observed in Chinese languages including dialects across China. The previous researches suggested that both of an elegant style near to the writing style and a rough style, namely a local dialect were spoken during the Ming and Qing period.

We propose that the intellectuals spoke the formal Cantonese used for formal occasions, and spoke an informal style of Cantonese at home with their family and servants during 19th century in Canton.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・中国語学

キーワード：粵語広東語 早期粵語

1. 研究開始当初の背景

(1) 二十世紀香港粵語を記述した資料は1. 西洋資料、2. 日本資料、3. 香港資料に大別できる。このうち2.は、時代的に1.と2.の欠落期間を補う重要な資料でありながら、国外ではほとんど知られていない。申請者は本申請に先駆けてすでに日本資料の目録を作成したが、研究に利用するまでには至っていなかった。

(2) 香港が自由貿易港として発展し、多くの人口が流入した結果、香港粵語は二十世紀にダイナミックな変化を経験した。それにもかかわらず、二十世紀香港粵語の変化を総括する研究はなかった。香港は1997年に中国に復帰し、中国大陸との往来が増えたことから、二十一世紀の香港粵語は、また新たな変化を遂げることが予想される。二十一世紀初頭の今、前世紀の言語の変化を「早期粵語」研究と現代語研究との間をつなぐものという視点から研究することには大きな意義がある。

(3) 通時的研究には資料の適切な使用が重要であり、特に日本人研究者には、日本資料の整理と紹介という点での貢献が期待されていた。

2. 研究の目的

本研究の目的は日本資料を活用して二十世紀香港粵語を研究することであった。それにより、従来の現代語研究と十九世紀の通時的研究の間の隙間を埋めることが期待された。具体的には、

(1) 日本資料の整理と紹介

本申請にさきがけて、申請者は清代民国時期の文献目録(「粵語早期文献資料(稿)」)を作成し、日本資料も収録した。これに加筆修正してより充実した目録にして学术界に公開する。

(2) 三種類の資料の総括

1. 西洋資料、2. 日本資料、3. 香港資料のそれぞれについて、資料の特徴を総括する。3. 香港資料については、既存の目録に収録されにくい教科書や商業的な出版物なども積極的にとりあげる。

(3) 二十世紀香港粵語の総合的な研究

以上で整理した文献資料を用いて、そこに記述された二十世紀粵語の変化の過程を詳細に調べる。たとえば、どの資料にも記載されているような基本的な事項、発音、指示代名詞、疑問詞、疑問文の形式、助動詞、常用の前置詞などについて、各資料の記述を一覧にして比較する。

3. 研究の方法

上記2. 研究の目的を達成するため、以下の方法をとった。

(1) 日本資料の整理: 既存の目録の加筆修正

(2) 日本資料の紹介: 系統的な解題の作成

(3) 西洋・日本・香港資料の総括

(4) 日本資料・西洋資料・香港資料に記述された二十世紀香港粵語の整理

4. 研究成果

上記2. 研究の目的の(1)(2)(3)に関して以下の成果が得られた。

(1) 日本資料の整理と紹介

日本資料に反映された当時の粵語の特徴について、香港政府から援助を受けたワークショップで招待講演を行った。国際的な学术界での関心が高いことがうかがわれる。

研究代表者が作成していた「粵語早期文献資料(稿)」に加筆・修正をして研究者の所属する愛知東邦大学のホームページで公開した。粵語の研究者は世界中にいるため、webでの公開は、学术界への大きな貢献が期待される。

(2) 三種類の資料の総括

前述(「粵語早期文献資料(稿)」)に加筆・修正をして研究者の所属する愛知東邦大学のホームページで公開)のとおり、文献目録への加筆はした。残念ながら、1. 西洋資料、2. 日本資料、3. 香港資料のそれぞれについて、資料の特徴を総括する段階には至っていない。今後の課題とする。

(3) 二十世紀香港粵語の総合的な研究

近代粵語の文法について網羅的な論考を発表した。(「十九世紀の広東語(1)-(6)」)これにより、粵語研究者だけでなく、他の中国語の方言の研究者にも研究成果を発信することができた。中国語の方言は相互に同類の語彙や現象を共有していることが多く、他の方言の研究者と情報を共有することには大きな意義がある。主な結論は以下の通りである。

(1) “的”の変遷

Morrison(1828)で“的”は普通話と同様に結構助詞として使用されるとともに、量詞としても使用されていた。現代広東語でも“的[tik]”は結構助詞としてややあらたまった場面で用いられ、“的”から派生した(と小文が考える)“啲[ti:]”は量詞として使われる。現代の量詞“啲[ti:]”の特徴は、複数のものや液体など数えられないものに対して特に量を明確に示すことなく使用するという点である。これに対して十九世紀の量詞“的”は、対応する英語訳から判断すると、可算名詞(単数および複数)と不可算名詞の両方、すなわち単数、複数、可算、不可算に関わらずあらゆる名詞に用いられていた。

この傾向は、以下 Bridgman(1839)から Stedman & Lee(1888)まで、つまり十九世紀末まで続く。“的”が単数複数に関わらず使

われていたことを裏付けるように、Devan(1858)では“呢的”の英訳を「This or these」、 “ 個的 ” の英訳を「That or those」としている。これは同書が“呢個”を「This」、 “ 個 [= 那] 個 [= 個] ” を「That」と訳しているのと対照的である。

しかしながら、このころから“ 的 ” は「何にでも使える」から「複数に使う」量詞へとシフトしていったようだ。Dennys(1874)は、「接頭辞“ 的 ” は名詞の前で少ない量を示す」(原文：The particle “ 的 ” before a noun signifies some, a little.) (Dennys1874:18) というように、“ 的 ” に不可算名詞と可算名詞に対して少ない量(すなわち、可算名詞でいえば複数)を示す機能があると指摘している。

さて、Fulton(1888)とBall(1888)以降、量詞の“ 的 ” はほとんど複数または不可算名詞に対して用いられるようになり——換言すれば単数の用法が淘汰され——、漢字は“ 啲 ”、発音はほぼ[ti:55]に統一された。これがそのまま現代広東語に踏襲されている。ではなぜ、“ 的 ” は単数の用法を捨てたのか。そもそもなぜ結構助詞である“ 的 ” が量詞として使用されるようになったのか。それは広東語の文法と関係がある。

第一に、広東語はいまいな量を表す量詞を必要としていた。広東語ではすべての名詞に対して量詞の使用が義務的である。たとえば、「この本」は普通話では“ 这本书 ” “ 此书 ” とともに可能であるが、広東語では必ず量詞を使って“ 呢本书 ” (“*呢書”)と言わなければならない。さらに言えば、指示詞がなくても(“ 本书 ” “ 那本 ”)、名詞がなくても(“ 呢本係我嘅。 ” “ これは私のです。 ” (これが本を指す場合。広東語の“ 本 ” は量詞))量詞は使わなければならない。しかし専用量詞はいずれも明確な量を表すものなので、特に量にこだわらずに「この本どうしたの? 」とか「それなあに? 」と気軽に言いたい場合大変不便であるし、水とか空気のように数えにくいものも言いにくい。こういうときにいまいな量を表す量詞“ 啲 ”があると“ 呢啲係咩呀? ” “ これなに? ” とか“ 啲學生好懶嘅。 ” “ 學生が勉強しなくて... ” とか“ 啲水好汚糟。 ” “ 水汚いね。 ” のように大変に便利である。

第二に、結構助詞が量詞になったのにも広東語の文法が関係している。広東語では結構助詞と量詞の区別がつかないことがよくある。というのも、普通話とちがって所有構文と関係節に量詞が使えるからである。その結果、“ 我的願望 (私の願望) ” のような構造における結構助詞の“ 的 ” を話者が“ 量詞 ” と再分析して、指示詞の後ろ(“ 個的野 (ああいうもの) ”)のように本来結構助詞が使えない構造にも“ 的 ” を量詞として使用するようになったのだと小文は考える。結構助詞がルーツのため、初めのうちは結構助詞同様、名詞の数に関係なく使っていたが、明確に単数であるなどの場合は専用量詞の得意

分野であるため、単数の名詞に対する使用は専用量詞に譲り、現在のようにそれ以外、すなわち複数とかはつきり量を言う必要のないときに使われるようになった。

		18c	19c 前	19c 後	20c
助詞	口語	嘅 ke			
	書面語 i)	的 tik			
量詞	複数 ii)		的 tik	啲 ti:	
	単数	専用量詞			

i)あらたまった場面、たとえば作文などを書く場合に普通話の文法で書いて、広東語の発音で読むなど。前頁脚注 2) 参照。

ii)液体、気体、粉など数えにくい名詞を含む。

(2) “ 個 ” の変遷

十九世紀初めの資料では“ 個 ” は量詞と指示詞の二つの統語的機能を持ち、発音は[kol]、声調は陰去で表されていた。その後“ 個個 ” (指示詞 + 量詞)という組み合わせ(= 以下、甲類)における指示詞のみが陰上で読まれるようになり、徐々に他の場合(= 以下、乙類)の指示詞も陰上で読まれるようになって、最終的に二十世紀中葉に指示詞は陰上、量詞は陰去という役割分担が成立して今日の姿になった。この変化は4つの段階を経た。

現代広東語の指示代詞“ 啲 ” (ko, 陰上)の来源は量詞“ 個 ” (ko, 陰去)であり、それは一度に変化したのではなく、まず意味弁別上の必要から一部の組み合わせにおける指示代詞が陰上にかわって、その後一語二音という不安定な状況を嫌って徐々に他の場合の指示代詞にも変化が及び、ついには専用の漢字まで獲得して、最終的に「指示代詞は“ 啲 ” (ko, 陰上)、量詞は“ 個 ” (ko, 陰去)」という現代の形に落ち着いた。

		19c 前	19c 中	19c 後	20c 前	20c 中～
指示代詞	甲類	声調	陰去	陰上		
		漢字	“ 個 ”		“ 啲 ”	
	乙類	声調	陰去	陰去 / 陰上		陰上
		漢字	“ 個 ”	“ 個 ” / “ 啲 ”		“ 啲 ”
量詞	声調	陰去				
	漢字	“ 個 ”				

歴史資料の分析を通して、当時の口語の中

に複数の層（文体差）が存在することを指摘した。すなわち、当時の知識人は、公の場所では書面語的スタイル、家庭等では口語的スタイルを使い分けていた。書面語的スタイルでは、書面語をそのまま話すこともあったが、純粋な書面語とも違っていった。

十九世紀 粵語	書き言葉	官話		知識人
	話し言葉	高級（粵語 + 官話語彙）		
		一般（粵語）	一般人	

このような視点は、他の中国語方言では報告されたことがあるが、従来の早期粵語の研究では顧みられなかった点であり、今後の早期粵語研究の主流となると期待できる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

竹越美奈子「早期粵語資料の文体考」『太田斎・古屋昭弘両教授還暦記念中国語学論集』2013, pp.332-341. (東京:好文出版), 査読なし。

竹越美奈子「十九世紀の広東語(6)選択疑問文のマーカ―」『KOTONOHA』2012, 120:11-13. 査読なし。

竹越美奈子「十九世紀の広東語(5)“在”」『KOTONOHA』2012, 118:5-6. 査読なし。

竹越美奈子「十九世紀の広東語(4)Yes-No疑問文」『KOTONOHA』2012, 117:12-15. 査読なし。

竹越美奈子「十九世紀の広東語(3)続“個”」『KOTONOHA』2012, 116:1-2. 査読なし。

竹越美奈子「十九世紀の広東語(2)“個”」『KOTONOHA』2012, 115:4-8. 査読なし。

竹越美奈子「十九世紀の広東語(1)“的”」『KOTONOHA』2012, 114:2-6. 査読なし。

〔学会発表〕(計3件)

竹越美奈子「十九世紀広東知識人の話しことば(ポスター発表)」第63回日本中国語学会全国大会、2013年10月27日、東京外国語大学。

竹越美奈子「早期粵語語料中の双層語言現象(早期粵語資料に見られるダイグロシヤ現象)」第21回国際中国語言学学会年次総会(IACL-21), 2013年6月8日、台湾師範大学。

竹越美奈子「論二十世紀前半葉日本粵語資料中の粵語語法(二十世紀初頭日本粵語資料の粵語語法)」Workshop on Early Cantonese Grammar 2011年12月14日、香港科技大学、招待講演。

〔その他〕

ホームページ等

「早期粵語文献目録(稿)」

<http://staff.aichi-toho.ac.jp/takekosi/mokuroku.pdf>

6. 研究組織

(1)研究代表者

竹越 美奈子 (TAKEKOSHI, Minako)

愛知東邦大学・経営学部・准教授

研究者番号: 50340401